



編集後記

IoTやAI、ARやVRなどこれからの社会のあり方を大きく変える可能性のある技術革新の発展が目覚ましい。またFacebookやインスタグラム、ラインといった、既に日常生活に定着しライフスタイルの変容を促すICT技術についても、その存在は無視できない状況になりつつある。

デジタル技術の発展とICTの貢献や効果及びサービスについて振り返ってみたい。技術革新と共にメールはもちろん音楽や動画配信などの分野で料金の低減や無料化が促進される、ネットスーパーやEコマースにより製品やサービスの購入が出来る様になる、いろいろなアプリが開発されて健康管理に役立てることが可能になる、SNSを通じてリアルタイムで情報が共有される、などが挙げられる。またそういった仕組みがなかった時代には、検索は図書館に向き書籍で調べる、もしくは知識を持つ人物に対してインタビューをするなどして理解を深めるなどの方法が一般的であったが、現在はネット検索で膨大な情報にアクセス出来るようになった。また利用者がアップした動画や写真などのコンテンツはもちろんのこと、ノウハウや利用者のレビューも蓄積される。この一連の流れを通じて、今後もアクセス可能で利用可能な情報量は益々増加していくものと思われる。多くの情報の中から自分にあったものにアクセス出来るようになる一方で、その中から自分にあったものをどのように選択するかが非常に重要になる。自分の状況に応じて正しい情報を選択することは簡単に聞こえるが実は難しい。

総務省の『平成18年度情報流通センサス報告書』によると、平成8年度を基準として指数化した情報流通量を見てみると、平成18年までの10年間で、選択可能情報量の伸びは530倍とのこと。一方で消費可能情報量は33倍だった。これは人々が選択することが可能な情報量の伸びが飛躍的に伸びる一方で、選択して消費することが可能な情報量の伸びはそれに伴っていないことを示している。約10年前の調査ということ踏まえると、現在はいったいどうなっているのだろう。情報の洪水の中に身を置いた場合、ある一定の量を超えると、どんなに価値のある情報に対しても耳や目を閉じ受け付けなくなるという研究結果もある。また次々と新しい情報が現れるため、興味関心が長続きせず飽きっぽくもなるらしい。

昨今の報道によると、約90%の中高生は自分専用のスマートフォンを持ち、日常的にSNSを使用しているという。日本も世界に類を見ないスピードで高齢化が進展、それに伴って私たちを取り巻く環境も大きく変化してきている。医療を取り巻く制度や仕組みについても社会の変化に合わせて変わっていくことが予想される。自分らしく生きていくために情報を取捨選択し暮らしに生かしていく力が求められる時代において、情報弱者への寄り添いとはどういうものかを考えないではられない。

(KT)

■ 編集

日本ジェネリック製薬協会
総務委員会広報部会

■ 発行

日本ジェネリック製薬協会
〒103-0023 東京都中央区 日本橋本町 3-3-4 日本橋本町ビル 7F
TEL: 03-3279-1890 / FAX: 03-3241-2978
URL: www.jga.gr.jp